

氏名（本籍）	GULOMALIEV Shirali（タジキスタン）
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 9646 号
学位授与年月日	令和 2 年 7 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ワヒー語形容詞に関する方言学的研究

主	査	筑波大学 教授 博士（文学）	白山 利信
副	査	筑波大学 教授 Ph.D.	池田 潤
副	査	筑波大学 准教授 文学博士	金 仁和
副	査	筑波大学 助教 博士（文学）	池田 晋
副	査	筑波大学 教授 博士（言語学）	小野 正樹

論文の要旨

本論文は、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン及び中国におけるワヒー語形容詞に関する方言学的アプローチに基づいた調査研究である。

ワヒー語 (Wakhi) は、インド・ヨーロッパ語族イラン語派パミール諸語に属する無文字言語であり、現在、ユネスコによって危機言語の1つに数えられている。ワヒー語の本格的な研究は19世紀後半に開始され、イラン語学の碩学たちによって主にタジキスタンとパキスタンにおけるワヒー語の研究が音声学・音韻論、語彙論、形態論、統語論などの観点から個別に進められてきたが、未解明の問題が数多く残されている。具体的には、ワヒー人がタジキスタン、アフガニスタン、パキスタン及び中国の4カ国にどのくらいの人口規模でどこに住んでいるのか、といった最も基本的な情報も明らかにされていない。また、それぞれの地域のワヒー語の方言的な異同についてもほとんど究明されていない。そこで、著者は、①長年不明とされてきたワヒー人の人数と村落・集落を自治体の記録等の客観性のある資料などを活用しながら可能な範囲で確定し、4カ国に跨る最新のワヒー語方言地図を作成すること、②これまでの研究で詳細に検討されてこなかった各国におけるワヒー語形容詞の使用状況を調査した上で、各方言間の差異の有無を確認し、類似点と相違点を明らかにすること、③調査結果に基づく新しい方言区分を仮説として提示すること、の3つを主要研究課題として設定する。

本論文は、序章と終章を含む全7章で構成される。序章では、本研究の背景を説明し、先行研究について検討する。さらにそれを踏まえて、本論文の研究課題とその研究方法を提示する。

第1章では、これまで不明であったタジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、中国のワヒー人が居住する村落・集落の数、位置、人数の詳細を、各国の地元自治体による人口統計資料や、現地のワヒー人インフォーマントへの聞き取りなどを通じて可能な範囲で明らかにする。具体的には、調査時点においてタジキスタンには23,816人（8村落、35集落、2,745世帯）、アフガニスタンには15,944人（42村落、60集落、1,506世帯）、パキスタンには23,606人（53村落、76集落、3,191世帯）、中国には8,251人（16村落、20集落、1,821世帯）、4カ国全体で71,617人（119村落、191集落、9,263世帯）のワヒー人が居住していることを明らかにしている。その上で、最新の情報に基づく、独自の新しいワヒー語方言地図を作成している。

第2章では、ワヒー語の系統と文字について概括的に説明した上で、ワヒー語の母音体系と子音体系につい

て検討・考察する。具体的には、従来の先行研究では、6母音体系 ([a], [i], [u], [ə], [ɪ], [o]) が通説であるが、従来の母音体系に[e]を加えた7母音体系 ([a], [e], [ə], [o], [i], [ɪ], [u]) が妥当との見解を示している。ワヒー語の子音体系に関しては、T. N. パハリナの先行研究 (39子音) を一部援用し ([ɹ], [ɺ], [j]) を未確認として除外)、ゴジャール方言 (37子音) とそれ以外のワヒー語方言 (36子音) で区別する考えを提示している。

第3章では、ワヒー語の形容詞の特徴として、主に統語的な視点から定語的用法と述語的用法について検討し、次の5つの特徴を指摘する。①ワヒー語形容詞は名詞を修飾し、名詞句を形成する。その際、ワヒー語形容詞は必ず修飾する名詞の前に置かれる。②修飾する名詞の性、数、格に合わせて語形を変えることはない。③述語的用法では、主語名詞の後に述語としての形容詞を置く。④現在時制では、英語の *be* 動詞現在形に相当する *ty* を形容詞述語の後ろに置くか、*ty* を省略する。*ty* の有無で文意が変わることはなく、文体的な差異も見られない。⑤形容詞述語文を否定するには、現在時制では、*be* 動詞現在の *ty* の否定形 *nast* を形容詞述語の後に配置する。

第4章では、ワヒー語形容詞語彙の使用状況に関する調査結果に基づいて、ワヒー語の新しい方言区分の可能性を提示する。先行研究では、タジキスタンのワヒー語の方言区分に関する見解がいくつかあるが、著者はタジキスタンの方言区分も含めて、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、中国を含めた4カ国全体のワヒー語の方言区分の可能性という観点から再検討している。その結果、国ごとの方言区分の他に、その下位区分として、タジキスタンに3方言 (タジク下部方言、タジク中部方言、タジク上部方言)、アフガニスタンに4方言 (アフガン下部方言、アフガン中部方言、アフガン上部方言、アフガンサルハード方言)、パキスタンに5方言 (プロギル方言、イシコーマン方言、チプルソン方言、ゴジャール方言、シムシャル方言)、中国に2方言 (タシクルガン方言、ホタン方言) が存在するという独自の仮説を提示している。

第5章では、第4章で明らかにされた各方言の調査結果に基づき、各方言における形容詞語彙の違いと複数の方言に共通する特徴などを検討・考察する。その結果、4カ国の各方言間の相関性について以下の8点を明らかにしている。

- ①4カ国のワヒー語方言で共通する形容詞語彙は約5割である。
- ②タジキスタンとアフガニスタンのワヒー語形容詞語彙が最も類似性が高い (73.2%)。
- ③4カ国のワヒー語方言で、現在すでに使用されていない形容詞語彙は11語 (0.2%) である。タジキスタンのワヒー語方言で、現在すでに使用されていない形容詞語彙は39語 (9.8%)、アフガニスタンは26語 (6.5%)、パキスタンは39語 (9.8%)、中国は45語 (11.3%) である。これらの事実は、過去50年から70年間の間に一定のワヒー語形容詞語彙が失われたことを示している。
- ④標高が相対的に高く、人の往来の難しい孤立環境にあるアフガンサルハード方言、プロギル方言、イシコーマン方言、タシクルガン方言でワヒー語の語彙 (特に馬や家畜関連の語彙) が相対的に良く保存されている。
- ⑤標高が相対的に低く、他の優勢な民族との言語接触機会がより多いタジク下部方言はタジク語の影響を、アフガン下部方言はダリ語やパシュト語の影響を受けている。
- ⑥チプルソン方言、ゴジャール方言、シムシャル方言が、母音 *ɕw/a* の不使用、語頭の */h/* の発音など、音声面でウルドゥー語の影響を受けている。
- ⑦ホタン方言が語彙と音声 (ワヒー語の *[ts]* を *[s]* と発音するなど) の両面で、ウイグル語の影響を受けている。
- ⑧タジキスタンのワヒー語形容詞語彙においてロシア語の影響が確認できない。アフガニスタンとパキスタンのワヒー語形容詞語彙において英語の影響が確認できない。中国のワヒー語形容詞語彙において中国語の影響が確認できない。

終章では、各章での議論をまとめ、研究成果を総括する。その上で、ワヒー語形容詞のみの調査結果に基づく方言区分仮説の意義と限界を指摘し、今後の研究の課題と展望に言及する。

審査の要旨

1 批評

1990年代以降、言語学者やユネスコが将来消滅の恐れのある危機言語の保存に力を入れる取り組みを続けている。ワヒー語は危機言語に入る無文字言語であり、本論文は、人類の文化遺産である危機言語の保存への貢献という社会的意義を持つ研究である。

ワヒー語の研究は19世紀後半に遡る。従来の研究では、ワヒー人が暮らすパミール高原を列強諸国が分割統治していた影響で、ワヒー語全体を対象とした調査が行えなかった。特にソ連時代は、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、中国のワヒー人相互の交流が断絶し、また言語学者の渡航も制限されていた。しかし、1991年のソ連崩壊後、ワヒー人の交流断絶が解消され、国境を跨いでワヒー語を研究できる環境が整った。本研究は、時代の変化がもたらしたワヒー語研究だと言える。

本研究の独自性は、4つある。まず、先行研究で手薄であったワヒー語形容詞を研究対象としたことである。ワヒー語品詞論の大半は動詞研究であり、形容詞の本格的な研究は本論文が初めてとなる。次に、タジキスタンのワヒー語に加え、アフガニスタン、パキスタン、中国のワヒー語を含むワヒー語全体を研究対象としたことである。4カ国全体のワヒー語を扱い、それらの方言差を明らかにした研究は類例がない。第三に、これまで正確な詳細情報が存在しなかったワヒー人の人数と村落・集落の数、場所を究明したことである。第四に、ワヒー人の人口と村落・集落の正確な情報に基づいた、4カ国に跨がる最新のワヒー語方言地図を作成したことである。

著者が究明した言語学的事実のうち、次の3点は、卓越した学術的成果として特に高く評価できる。まず、ワヒー語の方言区分について、国ごとの方言区分とその下位区分、国を越えた方言区分とその下位区分という2つの可能性を提示した点である。この仮説はワヒー語研究史上初の提案で、国境を越えたワヒー語方言研究の嚆矢となり得る。第二に、調査したワヒー語形容詞語彙のうち約1割が過去半世紀の間に失われたことを実証的に示した点である。この事実は、ワヒー語の、現時点での消滅の危険性の程度を示す貴重なデータであり、今後の定点観測の基礎資料となる。第三に、孤立環境の度合いが高い地域の方言で生活文化に根差した語彙が良好に保存されている反面、優勢な他民族との接触が多い方言が域内有力言語の影響を受けていることを実証的に明らかにした点である。これらは、言語接触が言語変化に及ぼす影響を示す新たな事例として、一般言語学的にも価値の高い発見である。

だが、本論文に課題がないわけではない。著者が示した方言区分仮説は、ワヒー語形容詞語彙の調査結果のみに基づいており、ワヒー語の全体像を捉えたものとは言い難い。より説得力のある仮説とするためには、名詞や動詞など、別の品詞でも同様の方言学のアプローチに基づいた実証的な調査研究を進めていく必要がある。

こうした課題については、著者自身も自覚しており、今後の発展的な研究を通じて解決していくべきものであり、本論文の学術的価値を損なうものではない。

2 最終試験

令和2年5月22日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。